

環境 みらい

2013

1



発行所

NPO法人環境みらい下関

〒751-0847 下関市古屋町一丁目18番1号

Tel (083) 252-7220

Fax (083) 252-7222

www.kankyo-mirai.jp

vol. 115

contents

- 巻頭コラム
「場所性に凹ずるまちづくり」
- 1月のリサイクル教室のご案内
- 環境部だより

monthly column

場所性に凹ずるまちづくり

NPO 法人環境みらい下関
理事長 坂本紘二

タイトルでは「応ずる」を取って「凹ずる」と表現している。いたって真面目に「遊び心は大事」と常々思っている。しかし、ここは、単なる「ことば遊び」に止めたくない。

昨年11月1日の下関市から頼まれた市街地整備促進協議会研修会における講演では、そのテーマを「場所性に凹ずるまちづくり」としていた。講演のために、これまでの都市環境やまちづくりにかかわる小生の各所における体験をさまざま思い起こしていたら、成功事例のことが多く「場所性」を的確にとらえ応じきれているゆえにうまく達成しえたのだ、と新たな発見のように確認でき、我ながら講演では妙に元気づいていた。

場所性が活かされた都市形成やまちづくりには例えば次のようなものがある。小河川しかなく白砂青松の地であり水源乏しいゆえに、福岡市は節水型都市づくりが達成できた。低平地で厚い有明粘土層に乗り、かつ洪水でも濁水でも被害に遭い易い土地柄の柳川市は、縦横に巡る掘割の諸機能を改めて確認できたことで、掘割蘇生・再生のまちづくりが成功した。山口市の一の坂川は、都市部の掘り込み河川ではあっても、ホテルの身になって工法が工夫されたゆえに、自然共生のホテル護岸ができた。そして、ヒトとモノと情報が一旦吸い寄せられて、ミガキがかけられて広く発信していくという下関市の交流結節点としての機能や市場(いちば)文化が十分に活かされたゆえに、「ふく」ブランドは確固たる地位を得ることができた、などである。

講演では、どの都市においてもこのように、場所の特質を読み、その場所の土地や風土の要請に耳傾け、場所性における潜在力＝ポテンシャルをゆっくりと押し広げ活かしきることを主眼に置くように、と訴えたつもりである。活かしかれないことこそが「もったいない」のだ。

では、なぜ、「凹」なのか。思いついたのは、例の「環境〇〇」と「〇〇環境」の違いからである(環境技術と技術環境／環境教育と教育環境／環境偽装と偽装環境／etc.)。

前者「環境〇〇」は目的がはっきりして限定的である。後者「〇〇環境」は私たちが置かれている状態(環境)を問かける用語になっており、対比的にはどうも「前者が凸型で、後者が凹型だ」と言えるように思ったのである。

それだけではない。3.11の東日本大震災は、それまでの私たちの生き方や文明のありように大きな節目を意識させているのだが、3.11以降のこれまでにさまざまな論調を見ていると、直観的で論証なんかできないのだが、大きな変わり目としてさまざま論じられていることが、なぜかしらどうも「凸から凹へ」と大きくくりできるように、小生には思えるのである。



凸のシンボル
「海峡タワー」



凹のシンボル
「チャンネルシティ」

(次ページへつづく)

(前ページつづき)

それだけではない。3.11 の東日本大震災は、それまでの私たちの生き方や文明のありように大きな節目を意識させているのだが、3.11 以降のこれまでにさまざまな論調を見ていると、直観的で論証なんかできないのだが、大きな変わり目としてさまざま論じられていることが、なぜかしらどうも「凸から凹へ」と大きくくりできるように、小生には思えるのである。

例えば、下関豊浦の「川棚の杜」を設計した隈研吾は『場所原論』(市ヶ谷出版社、2012年1月)で次のように述べている。1755年のリスボン大地震は普遍化の時代(=場所と人間とを切断する時代)の始まりだったが、「逆に東北の大地震は、場所と人間とを再び結び付け、『小さな場所』を復活させる時代の始まり」だと。また、辻信一は田中優子との対談(『降りる思想』大月書店、2012年10月)の中で述べている。経済成長志向の「ファスター、ビガー、モア(より速く、より大きく、より多く)」に対して、3つのSから始まる「スロー、スモール、シンプル(遅い、小さい、簡素)」が、「世界をギリギリまで追い詰めてしまった『過剰』を解決する力になるのでは」と。3.11の節目は、「過剰な競争」や「切断」の攻撃的



川棚の杜

なイメージの凸型から、ゆっくりと結び付き合う受身的なイメージの凹型への転換を志向しているように思えるのだが、どうだろう。

……ともかく、今年から本格的に用いる我が NPO のシンボルマークには、うまい具合に幸先よく、下関市の場所性と「スロー、スモール、シンプル」の3つのSが込められている。

環境みらい下関「シンボルマーク」



(2012.12.26)

ボランティアの募集をしています

今年度より、下関市生涯学習まちづくり「出前講座」に「207 環境教室」として「牛乳パックでハガキ作り(紙すき)、新聞紙などでエコバック作りを体験し、ごみの減量を考えます。」の内容で登録いたしました。

登録後、この講座に多くのお問い合わせ等(当法人に)頂いており、今後もお要望にお応えするためにも、一緒に活動頂けるボランティアの方の力が必要です。



ご希望の方は、NPO法人環境みらい下関(Tel083-252-7220)へお問い合わせください。

しものせき環境みらい館 は、

「見て」「聞いて」「触れて」「楽しみながら」
リサイクルの体験・学習ができます。



しものせき環境みらい館 ご利用案内

- 開館時間 10:00~17:00まで
 - 休館日 月曜日(祝日の場合は開館し翌日休館)
- サンデバス停「垢田」「稗田中央」より徒歩 約5分
電話(083)252-7220 FAX(083)252-7222
<http://www.kankyo-mirai.jp> eco@kankyo-mirai.jp





1月のリサイクル教室のご案内



曜日	日時	講座名 講師名	講座内容
火	8日 10～15時	組みひも 津森 美智子	古布及び毛糸などを利用して、帯締めや各種ヒモ類を作ります。 持参する物:参加料 400 円・裂き布・毛糸など・昼食 定員:4名
	22日・29日 10～12時	着付け 津森 美智子	着物の着方、名古屋帯の着方。 持参する物:参加料 400 円・着物・帯・その他小物 定員:10名(2日間参加できる方限定)
	22日・29日 13～15時	和服のリサイクル 芳川 妙子	着物や帯で袋物やベストを作ります。 持参する物:参加料 400 円・ゆかた・着物・帯・裁縫道具 定員:10名(2日間参加できる方限定)
	8日 10～12時	廃食油で石けん作り 福井 和恵	廃食油を材料にして石けんを作ります。 持参する物:参加料 150 円・エプロン 定員:20名
水	9日・23日 10～12時	布あそび 森田 芙路恵	古布で、今着たい服を作ります。 持参する物:参加料 400 円・不用の布・裁縫道具 定員:15名
	16日 13～16時	古布でぞうり作り 佐藤 緑	持参する物:参加料 400 円・30cmものさし・はさみ 洗濯バサミ 2 個 綿で縦布(幅 10cm、長さ 60cm)40本 (幅 9cm、長さ 75cm)1本 (幅 2cm、長さ 35cm)4本 (幅 6cm、長さ 45cm)1本 定員:10名 1月18日と2日間できる方限定。
木	17日・31日 10～14時	古布で小物 永岡 ハツエ	古布で「季節の小物」を作ります。 持参する物:参加料400円(材料代別)・裁縫道具・手芸用ボンド・軽食 定員:10名(2日間参加できる方限定)
	10日・24日 10～12時	パッチワーク 小笠原 典子	ミニタペストリー・バッグ・小物などを作ります。 持参する物:参加料 400 円・裁縫道具・材料のハギレ 定員:10名
	10日・24日 13～15時	毛糸で小物 内田 チズ子	最初はあまり毛糸でタワシを作ります。 持参する物:参加料 400 円・中細くらいの毛糸・カギ針 4～5 号 定員:10名
	10日・24日 13～16時	表具 森 宏司	掛け軸や色紙掛けを作ります。 持参する物:参加料 400 円(材料代別) 定員:5名(2日間参加できる方限定)
金	日 13～16時	古布でぞうり作り 佐藤 緑	19日の続きから編みます。 2日間参加できる方限定。
	11日・25日 10～12時	裂き織り 小笠原 典子	木綿や絹の古着を裂いて、バッグ・インテリアグッズを作ります。 持参する物:参加料 600 円・木綿や絹の古着・ハサミ・昼食 定員:8名 ※織り機持参者はこれ以上も可※参加料は同じです
	25日 10～15時	エコクッキング 家根内 清美	持参する物:参加料:600円・エプロン・三角巾・筆記用具 定員:20名 場 所:山口合同ガス本社体験ハウスひまわり館 3 階 下関市本町三丁目 1-1 電話 223-2111 締切り:18日(金)まで
土	5日・19日 10～12時	布のリフォーム 高田 和代	古い着物や衣類を蘇らせ、自分だけの一着を作ります。 持参する物:参加料 400 円・裁縫道具・解いた服や着物 定員:10名
日	13日・27日 10～12時	ガラス工芸 木下 照親	ガラスに砂を吹き付け削り、オリジナル絵柄作品を作ります。 持参する物:参加料:1回 400 円・ガラス製のコップ・鉛筆 定員:10名

◎教室の申込み方法◎

1月5日(土)午前10時～電話受付を開始します

<申込みが少数の場合及び、講師の都合等により中止や延期になる場合がありますので、ご了承ください>

環境部だより 下関市環境部環境政策課より

下関市の環境行政を担っている環境部について、下関市が取り組んでいる事業等について、機関誌「環境みらい」で毎月ご紹介いたします。

今回は、第1回目として、環境政策課が取り組んでいる環境保全です。

下関市環境政策課では、環境保全について、監視・指導・啓発等の取り組みを行っています。

中でも、本年度から力を入れている施策の一つが、環境ESDです。環境ESDとは聞きなれない言葉ですが、直訳すると「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development)です。一人ひとりが環境の課題と身近な暮らしを結びつけ、人と自然の共存を学ぶことを目的としています。

従来から市では、特に未来を担う子供たちを対象に「水辺の教室」や「自然観察教室」、水質や大気環境についての「環境教室」等を行ってきましたが、これらの教室での指導において、市の職員だけでなく、自ら考え、リーダーシップを発揮して環境保全に対する取り組みを行うことのできる環境人材を育成し、今までの事業を発展させていきます。

現在主に小学生を対象とした教室では、水産大学校と下関市立大学の学生さんが環境リーダーとして活躍しています。特に「水辺の教室」や「自然観察教室」では、河川や磯の生物、公園の植物などを調べて、生態系についての説明するため、生物についての様々な知識が必要です。そのため、専門家や山口県の自然観察員の方々を講師として、勉強会を開催しました。教えてくださる先生方も自分の知識を後輩に伝えたいと考えておられます。将来はこれらの観察教室に参加し、自然環境に興味を持った子供たちが大人になり、環境リーダーとして活躍してくれることを願っています。



現在「みらい館」には、ごみの分別等を学ぶため多くの小学校が見学に来られています。その際、地球温暖化対策に興味を持ってもらい、家庭で出来る二酸化炭素の削減に協力してもらうための温暖化対策教室をしております。また「環境みらい」と共催しております「キッズエコフェスタ」や「エコフェスタ」でも、市の地球温暖化対策を紹介してもらいました。

今後も「環境みらい」や参加されているNPOの方々と共に、環境ESDを進め、持続可能な社会の構築を進めていきたいと考えております。